

優秀賞（愛媛マンダリンパイレーツ賞）

「命のぬくもり～強く生きる背中～」

愛南町立城辺中学校 2年 川村聖笑姫

去年の八月、私は忘れられない出来事を経験した。近くに住んでいる、大好きな祖父が感染症にかかり入院してしまったのだ。それまで毎日朝早くから働き、いつも笑顔を見せてくれていた祖父が、病気で苦しむ姿を見て、命について深く考えさせられた。

祖父は、高知県の病院で全身麻酔を受け、肺を休ませる治療をすることになった。医師からしばらく眠ったままになると説明を受けたことを母から聞いた。私はとても怖くなった。もしこのまま目を覚まさなかったら、おじいちゃんとはもう二度と話せなくなるかもしれない、そう思うと、心が痛かった。

祖父が眠り、数日たったころ、お見舞いに行った。たくさんの器械が置かれた病室で、静かに目を閉じている祖父は、何本もの管でつながれていた。いつもの元気な声も表情もなかった。手は少しだけ温もりを感じたが、普段とは違う祖父の姿に、とても怖くなった。祖母や父や母は、「早く元気になってね。」「おじいちゃん、元気になってね。」

と声をかけていた。私は心の中で同じように思っていたのに、声に出して祖父に伝えることができなかった。涙が止まらず大泣きしてしまったのだ。もしかしたら祖父が亡くなってしまうかもしれないという不安や怖さから、ただ立ちつくすしかなかった。今思えば、その時「大好きだよ、待ってるよ。」と伝えればよかったと、後悔している。

しかし、祖父は強い人だった。医師や看護師の方のおかげで、少しずつ回復し、やがて目を覚ました。約一ヶ月の入院を乗り切り、祖父は退院をすることになった。退院する日、病院に迎えに行くと、私の姿を見た祖父は、「迎えに来てくれてありがとう。」と言って、笑いながら歩いてきた。自力で歩いている祖父を見て、リハビリを頑張ったのだな、元気になってほしいという私たちの願いが届いたのだと思い、うれしさから自然と涙が出てきた。家に戻った祖父を見たときは本当に安心した。

元気になった祖父は、今まで以上に家族を大切にしてくれるようになったと感じる。毎年夏には仕事場でバーベキューをしてくれる。家族や友達と、お肉や野菜を焼きながら楽しい時間を過ごす。祖父は、七輪を何個も並べて火を起こしてくれ、大きな板でテーブルを作っ

てくれる。私たちのために大変な準備を一人でしてくれる。今年もみんなの笑顔を見て嬉しそうにしている祖父の姿を見ると、私は心の底から幸せを感じるのだ。

祖父は、毎日一生懸命仕事をしている。市場で魚を買い、茹でて、薪でいぶす。暑い日も寒い日も、汗をかきながら働き、私たちに美味しいご飯を食べさせてくれる。祖父や父が作った鰹節で出汁をとると、とてもいい香りがする。その出汁を使って祖母が作る筑前煮が私は大好きだ。懸命に働く祖父の背中を見ながら私は育った。明治初期から続くこの家業を守ってきた祖父を、私は誇りに思う。

それだけではない。祖父は、私の部活動の試合を見に来てくれる。応援席で手を振ってくれる祖父の姿を見ると、不思議と力が湧いてきて、全力でプレーすることができる。祖父に負けないように、もっと頑張ろうと思える。祖父が私に向ける眼差しは、とても温かい。祖父から愛されていると感じる。私にとって何よりも心強いエールだ。

私は、病気で眠り続けていた祖父と、今こうして元気に笑っている祖父の姿を比べるたびに、命の大切さを考えるようになった。人は、いつ病気になるかわからない。大切な人がそばにいることは当たり前ではないのだと心から思った。だからこそ、元気でいる今を大切に

したい。

あの時私は、「元気になってね。」の一言が言えなかった。しかし、これからは私の気持ちを伝えていきたい。「ありがとう。」「お疲れ様。」「大好きだよ。」と、照れずに言えるようになりたい。後悔しないように、大切なことを伝えることができる人になりたい。そして、祖父に喜んでもらえるように、私自身も、勉強や部活動を一生懸命頑張りたい。

私は、祖父のことが大好きだ。ずっと長生きしてほしいと願っている。これからも、家族のみんなと一緒に美味しいご飯を食べたいし、試合を見に来てほしい。そして、まだまだたくさんの思い出を作っていきたい。あの夏に経験した怖さや不安、後悔を忘れずに、毎日を大切にしていきたいと思う。祖父がいてくれる日々は、私にとって何よりの宝物だ。

病院で祖父の命のぬくもりに触れたとき、残した後悔。振り返ることで、私なりに受け止めたい。人はみな、年を重ねて老いる。いつか終わりが来るひとつしかない命。その日まで、命の宝物をずっと守っていきたい。

おじいちゃん、これからも、大きくて力強いその背中を、見せ続け

○無断転載禁止○ ※本作品を広報誌等に掲載したい場合は、下記に御連絡ください。  
松山地方法務局人権擁護課 TEL (089) 932-0888 (代表)

てね。